第207号

報

岸

済宗・妙 心 寺 臨 派 住 松 原 信 樹 松 覚 樹 佛母寺住職 原 原 3451 - 1853FAX 3451 - 6094

振込 00160-0-104918 東京都港区三田5丁目9-23 (郵便番号 108-0073)

Email: info@ryugenji.com

URL: http://www.ryugenji.com

名乗り、コミュニケーションをとって、社会の中 くの縁によって生かされています。例えば、 けません。親から頂いたもので大きくなります。 んは、 それは、自分だけでなく、ふれあう人々にも、きっ く、こころのことではないでしょうか。そして、 ときも、どのような逆境にあっても、ひねくれたり、 つまり、私たちは一人では生きていけません。多 と、こころ暖まる思いを呼び起こさせるものです。 寂しがったりせずに、柔軟に全てを受け入れてい にしても、親につけていただいて、それを私達は 豊かなるおもい、それは、悲しいときも苦しい 詩の中で、子は母に見守られています。赤ちゃ 誰かにみてもらわないと、決して生きてい

彼岸に思うこと

豊かなる 言葉なくして 念(おも)ひに通ふ 見守られつつ 母の笑み

照井 親資

こころの中に持つだけでも、報恩という恩返しに

『雑宝蔵経』という

らないくらいの豊かなおもいを、

普段、

私たちが

そこで、詩に描写される、母と子の間の言葉もい の意味での恩返しをすることは難しいようです。 報恩という恩返しをしたくても、なかなか、 になった恩返しをしたいと思うわけです。 けないから、

誰かにお世話になって、そのお世話

しかし、

ること。 所を譲ること。困っている人に自分の家を提供す のために心を配ること。困っている人に、席や場 と。自分の身体でできることを奉仕すること。 やかな顔で接すること。やさしい言葉で接するこ 経典は、次のように説きます。 なるのではないでしょうか。 やさしい眼(まな)差(ざ)しで接すること。にこ

他

ところから、七つのことを実践したいと思います。 をはさんだ前後三日間にして、一人一人が身近な 止められがちですが、自分を見つめ直す、 というと、とかく亡き人の冥福を弔う事にだけに もができる無財の七施という布施行です。 正しい信心を持てば、自然に豊かなこころを持つ 「ねがい」であり、決してお金のかからない、 これら七つは、豊かなるおもいから流れ出 お彼岸 お中日 る

かされている自分を感謝し、報恩の行を積みまし

龍源寺の本山である妙心寺の生活信条に、

生

ょう」とあります。人は決して一人では生きてい

で生きています。

ようになります。それが、彼岸です。

金 五万円

竹下 靖子殿

金 五万円

金

 \overline{H}

万円

森山 英一殿

和久 洋士殿

日月庵坐禅堂寄付

金 一万四千円

竹内 隆幸殿

金 三万四千二百六十四円 龍源寺

師岡 恒夫殿中川一政画伯作(絵画「梅と椿」

ありがとうございました

納める経蔵を建立する計画をしております。*将来は、本堂の裏地を整理して、大般若経を

お彼岸法要

Defroebrother which whic

一、三月二十一日(午前十一時より)左の通りに行ないます。ご家族そろってお参りください。

一、読経

一、法話

一、会費(お布施)

※駐車場はありません。南北線をご利用ください。

至目 (中国) (中

都 06

品 97

品川駅

渋谷駅 — 新

斯 — 新林男

古川橋下車

— 新宿駅西口

1 魚ラン坂下・古川橋下車

五反田駅 ― 品川駅 ― 六本木ヒルズ

東京駅南口 ―(目黒駅)― 等々力操車場 魚ラン坂下下車 3万円駅 『プラー・ファフェー)

龍源寺の歴史について(一)

松原 泰道

録であります。 よる寛文八年 龍 第四 源 寺 世 に 0) 伝えられ 絶外和 一六六八 尚 7 の書上げに いる古文 年)の記

四年) いい のみくじ箱などに「永禄七年改焉 それは水月観音(現在当寺安置) ありませんが、永禄七年(一五六 ―にあり、創立年代は明らかでは と龍翔院 の文字があるからです。 それによりますと、 以前に逆のぼれるようです。 今井村— (りゅうしょうい 現在 の六本木付近 龍 源 寺は h ŧ

六九八年)です。 地へ移建されたのは元禄十一年(一今井谷町、麻布新町へ転じ、現在種々の事情で同所から麻布台町、

上杉定勝公の女で、後に仏門に入龍翔院を開いたのは、米沢の城主

名づけ、越溪宗格(えっけいそうか 下谷に松嶺寺を開いています) 基して同禅師を始祖と仰ぎました。 つ (松嶺隠尼はこの外に、芝に興禅寺、 く)禅師を迎え、更に龍翔院 人坂の南に庵を営んで松雲庵 た 松 嶺 隠 尼 で す。 初 め 目 を開 黒 بح 0)

奥平昌成(まさなり)公が、 可を得たものです。元文四 見大居士」に因み、寺社奉行の許 のは、当時の五世正天和尚に帰 二十七年前にあたります 七三九年)とありますから、 から頂いた法号「龍源寺殿徳翁 した豊前 龍翔院を「龍源寺」と改称 (大分県) 中津の 年 城主・ 、和尚 二百 した 道 依

基と尊崇いたします。翔院開基。奥平昌成公を龍源寺開翔・龍源開山と仰ぎ松嶺隠尼を龍沼うした因縁で越溪禅格禅師を龍

あり、水月観音は安産の観音さまと心寺末龍翔院、安産観音堂あり、 と「江戸名勝図絵」に 『麻布古川、妙江戸時代の地理書「江戸砂子」や

年十二月十五日発行より抜粋)

源

寺

第七

号

昭

和

+

九

危険のため伐りましたが、 存じます。 きな老松があったことをご してよく知られていたようです。 一丈一尺、 いお方 大戦前 樹齢四百七十余年 は、 寺の入口の西に に 枯 れはじめ 目通し 記 を数 憶と

あったわけです。の大松は二百五十余年の老松で現在地に移建された時も既に、かこの点から考えても、龍源寺が

えました。

はお寺 時代 知宣 思 ものです(つづく) になるとフクロが淋しげに鳴い るのが楽しみであった。と、 ダンゴ〉を売っていた。 木の下には茶店があって〈松の れいで、アユもすんでい お檀家のひとりで、今は亡き福 Ш 0) わ まいりよりもダンゴをたべ 翁が ″ 古川 て懐 たくしに語られたことを か しくなります。 の流 n 子供 た。 も昔は 少年 0 木 頃

だき、 住職・ 年前 より、 様で、 日に、 りすぎて、 させていただきます。 いる葬儀社がない方は、 させていただいております。 れが今の龍翔院観音堂です。 ある龍翔院 借地を戻し境内にし、龍源寺の前身で 史」を掲載します。 引き続き、本堂に祭壇を設けてますの していただきます。檀信徒の皆様 表しまして、檀家総代の方々にご出席 いつでも御来山ください。 に遡ります。 寺院の皆様、 河野太通老師に導師をしていた 観音様と松嶺隠尼にお経をあげ 泰道和尚が書いた「龍源寺の歴 お葬式をだされる場合、 慌ただしいのが現状です。 を行 和尚 の復興を果たしました。そ ね。 春彼岸を迎えます。 一十八日に なすべき事がたくさんあ 当日は、 います。 • 父である哲明和尚 志ずの七回忌の法要 全て年代が約 檀信徒の皆様を代 泰道 いざ、ご家族が 姫路の: 早い 葬儀社を紹 和 毎月十八 t 尚 ▼お檀家 ▼ 今 号 知って 龍 の 五十 哲 五 は 門 で は

月に、 持ち、 が、 きます。 仏 0 を守っていただければ、 口 式・家族葬・密葬も執り行うことが しくは、花園会館を使用してのお 番はじめに龍 とお葬式ができないゆえに、 お葬式をだされる場合、 常に慌ただしい る人々の芸術、 ました。 それは、 もよい永代供養塔です。 区広尾にある東北寺内龍源寺墓地・合 相談もうけさせていただきます▼渋谷 指定業者となります。 ただきたいと思います。龍源寺本堂も 船は、 お墓を使用できます。 事に慣れ と思い イタリア古寺巡礼』の文庫本を手に 墓地もございます。 はじめてイタリアに行きました。 和辻がみたロー (本堂・花園会館使用の際は、 学生時代に読んだ和辻哲郎 墓地の継承者を気にしなくて 年 口 ている僧侶の私でさえ、 遅れ 源寺にお電話を入れ 1 宗教を感じながら帰国 体験をしました。 マの風 の新婚旅行にもなり) 又 土 ・マを、 どなたでもこ 僧侶がいない 又、若干です 龍源寺の規則 ▼昨年の十二 そこに生き まず、 生前のご 私 もみた ŧ 7 で 非 葬 11

です。 ます。 す。 月二十日、 弟二人も元気にしており、二人とも家 仕事を両立して、がんばっております。 みいただけたらと思います。 いた JR君津駅から仏母寺までバスを用 鹿野山・仏母寺で春茶会を開きます。 やかになりました。 勉強に活かしていきたいと思い える必要を感じました。 の感覚みたいなものを、 致しました。 0 庭と仕事を大切にしております。 である客室乗務員のお仕事と龍源寺 お電話下さい。 お会いできること楽しみにしておりま いただける方、 母は茶道の先生・民生委員と活躍中 お野菜の刻みを行います。 しますので、 宗教などに於い 三月二十一日、 お茶のお稽古をする座敷も 午後一 帰 妻、 宜しくお願 国後、 春の一日をおたの 時より、ちらし寿司 亜矢も会社の仕 四月五 て、 改め お彼岸で皆様と 今後の自分の きちんと押さ て、 E い 日 詳しくは、 1 申し上げ お手伝 日) 、ます。 芸術 ロッ に

(松原信樹)